慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヴォルテールの史學的業績
Sub Title	
Author	後藤, 末雄(Goto, Sueo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.3 (1935. 12) ,p.23(389)- 57(423)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19351200-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヴォルテールの史學的業績

後藤末雄

一

ルイ十四世はフロンド事件以後リッシュリューの長逝を機會として萬機を親裁し、大いに諸侯を威壓して王權を確立するに至つた。次いで「ナントの勅令」を撤回してプロテスタント教徒を悉く國外に驅逐し、ラブレー、モンテーニュの衣鉢を襲ぐ自由思想家に彈壓を加へた。かくて自由思想家は國内に屏息し、或は新教國に亡命して、祕かに再起の機會を窺つてゐた。其故「イタリー遠征」によつてフランスに傳來された「文藝復興思想」すなはちギリシヤ・ローマの思想はカトリック思想に同化され、且つ國内にはカトリック教徒よりほかには居なかつたから、國民全部が國王と同一の宗教を信じ、同一の國家意識を有するに至つた。かくて思想的統一が初めてフランス國内に實現したのである。

かくの如き國民思想の調和、精神生活の統一といふ社會現象を一面から觀察すれば、壓制政治の確立

と其の勝利とにほかならなかつた。實際ルイ大王の治下に於いては政治學說は勿論のこと、總て國民の思想活動が王室の御用を務めて政府の走狗と化し、たゞキリスト敎の讚美、王業の祝頌といふ阿附迎合の一點に集中されてゐた。

當時の歷史も此の傾向に追隨して、ひたすら曲學阿世の醜態を示してゐた。歷史家の光榮は王室の御用係に任ぜられて年金を下附されることであつた。そして歷史家が苟くもキリスト敎や王室の權威を冒瀆し、或は國家の政策と牴觸する事實を闡明するならば、この歷史家は忽ちバスチーユに收監されたのであつた。例へばメズレー（Mézeray, 1616—1683）は「フランス史略」（Abrégé chronologique de L'histoire de France, 1668）の中で、租稅、殊に人頭稅の起源を說明した爲に忽ち當局から睨まれ、またフレレヒ（Fréret, 1688—1749）は「フランス人の起源」（L'origine des Français）といふ講演を試みて、フランス人の祖先たるフランク人の帝王がローマ皇帝に臣從の禮をとつてゐたことを證明した爲に、卽時、政府の忌諱に觸れて、バスチーユの鐵窓に呻吟しなければならなかつた。かくて年金への垂涎と下獄の恐怖とが史學其者の發達を阻害するに至つた。かのラパン（Rapin, 1621—1687）は「歷史的眞理は民心の奧所に探求しなければならない。苟くも國王の利益を侵害する事實を公表してはならない」と提唱し、エノー（Hénault, 1685—1770）は「ストーヴの片隅では、こんなことも口に出來るが、書いてはならない」と後輩に敎へてゐた。(1)

かくの如くルイ十四世の時代には思想の自由は勿論のこと、學問の獨立も保障されてゐなかつた。第一、當時の知識階級は歴史其者の意義を理解せず、歴史を雄辯の一種と見做し、若くは今昔の物語、或は小說の一種とさへ心得へてゐたのである。

古來ヨーロッパでは侵略戰爭と豪奢とが國王の主要な事業であつた。其故ルイ十四世は數回も無名の師を起して、征服の光榮に陶醉してゐた。同時に壯麗無比なヴェルサイユ新宮の內殿に神の如く鎭座して、諸侯や貴嬪に圍繞されながら、國務を統裁してゐた。とにかくルイ大王の勢威により、遂にフランスは世界第一の强國となり、列國はフランスの國威に慴服してゐた。更にルイ十四世は文化的の意義に於いても世界に覇を制せんと欲し、先づフランソワ一世の故智に倣つて文藝を擁護し、一流の藝術家を愛護して、多額の年金を下賜されてゐた。その結果コルネイユ、ラシーヌ、モリエール等の文豪が輩出して、「古典文學」の黃金期が出現したのであつた。

當時、自然科學が勃興して、デカルト、ライプニッツ、ベーコン、ニュートンが現はれ、世界の學者は自然科學の研究に沒頭し、新事實や新理論の發見を誇つてゐた。ルイ十四世は性來、科學に興味を懷き、就中、幾何學の理論に精通されてゐた。既にフランスに於いてはデカルト、パスカル、フェルマ(Fermat, 1601—1665)の如き碩學が堂々たる業績を擧げてゐた。そしてコルベールは科學著の要求を容れて、その研究を保護する目的のもとに科學アカデミーを巴里に設立せんことを國王に進言した。自然

科學に對する擁護は未曾有の王業であつたし、且つルイ十三世時代に設立された文學アカデミーと對抗すべき新事業であつたから、ルイ十四世は直ちにコルベールの提案を承認し、即時、此の計畫の實現に着手すべきことを命じた。かくて一六六六年に科學アカデミーが巴里に創設され、その會員は文學アカデミーの會員と同じく政府から年金を下賜され、殊に研究上の便宜と特權とを賦與されたのであつた。

抑〻自然科學の中で幾何學と天文學とはギリシャ文明の遺產であつた。そして此の兩科學は當時に於ける科學研究の二大對象であつた。其頃、天文學者は科學アカデミーの庭園や、ルーヴル宮殿の內園で天文現象を觀測してゐたが、その不便を痛感して天文臺建設の必要をルイ十四世に進奏した。ルイ十四世は此の出願の妥當性を認めると同時に約百萬リーヴルの巨費を投じて、一六六七年、巴里に天文臺を建設せしめられた。加之フランスにもオーズー（Auzout, 1630—1691）、ピカール（Picard, 1620—1682 ou 1684）の如き優秀なる天文學者があつたにも拘らず、政府は勅命を奉じてオランダからホイゲンス（Huyghens, 1629—1698）、イタリーからカシニー（Cassini, 1625—1712）、デンマークからはルーメール（Roeumer, 1644—1710）を招聘して、天文學の研究に從事せしめた。殊に一六七一年にはホイゲンスを科學アカデミーに迎へて、更に之れを巴里の天文臺長に任じたのである。なほコルベールはドニ・ド・サロー（Denis de Sallo, 1625—1669）に資金を供して、「學者雜誌」（Journal des savants）を一六六五年から創刊させて置いたのであつた。かくて研究者、研究機關、研究發表機關の三者が完備した爲に、フ

ランス天文學は嶄然たる進歩を遂げ、ニュートンが「萬有引力說」を發見して、デカルトの「旋回說」が殁落するに至まで、實に世界の斯學を壓倒してゐたのである。その他、物理學、醫學、植物學、生物學等のフランスに於ける發達に就いては之れを省略して置く。たゞルイ十四世は屢〻科學アカデミーや植物園に行幸され、科學者の業績に天覽を賜ひ、激勵の優諚を賜つたことだけを附言して置かう。(2) 實際ルイ十四世を目して、文藝のみの愛護者と見做すのは甚だ誤りである。キュヴィエの說によればフランスに於いて、學問を奬勵したものはフランソワ一世であり、文學を奬勵したものはリッシュリューであり、自然科學を奬勵したものはルイ十四世だつたのである。(3)

前述の通りルイ大王の愛護に浴して、天文學、數學を始めとして、其他の自然科學が長足の進歩を遂げた。そして此の進歩は全くデカルトの唯理論すなはち其の「學問研究法」の恩惠によるのである。科學者は飽くまで事實を尊重し、これを分析し、實驗して「明證」の認めた現象、若くは事實のみを科學的眞理と見做すのである。斯かる研究の原理をなすものはパスカルの所謂「幾何學的精神」であり、「數學的理性」すなはち「科學的理性」に他ならない。併し在來の理性と稱するものは「三位一體の神」から發する人間の良心すなはち正邪善惡の直觀力に過ぎない。所謂「良智」或は「常識」を意味し、未だ神學的意義から脫却してゐなかつた。然るに科學的理性は一切のドグマに懷疑の分析を加へて、聖書の記述と雖、「明證」と相容れない時には、斷然、之れを否定したのである。例へば新興天文學は聖書の天

動說に對抗して地動說を提唱し、敢然、前者を一蹴したのであつた。

ルイ十四世は「敎會の長子」と呼ばれたほど徹底的な正統派の信者であり、その爲には「ナントの勅令」を撤廢して、プロテスタント敎徒を國外に放逐したのである。然るにこの國王は科學を愛護して、聖敎の敎理と相容れない科學的理性の發達を促したのであつた。勿論、當時、科學は一種の詩文と同視されて、ルイ十四世もまた科學知識を弄んでゐたのである。從つて此の國王は科學の本務を理解せず、たゞ科學趣味に興じてゐたのに過ぎなかつた。そして國王の科學趣味は朝野の知識階級に滲透し、遂に文藝趣味が俄に凋落を來たしたほど流行するに至つた。

思ふに科學上の新理論や、新發見は決して學問の小天地に跼蹐するものではない。必ず此等の新原理は哲學の領域に步武を進めて直接、人間の思辨を革新し、延いて社會生活を更改するものである。かのデカルトが科學者であると同時に哲學者であり、またデカルト派の科學者が啓蒙哲學を提唱してフランス大革命の氣運を釀成したことも此の理由に基くのである。

殊に科學知識は思想其者でなく、しかも人間生活の便益と幸福とを增進するから、如何なる國家も稅關を解放して科學知識を歡迎するのである。とにかく科學の發達によつて科學的知識が新しく創造されたこと、從つてフランス人の知識の總和が增加したことを見落してはならない。

フランスは「宗敎戰爭」の瘡痍に疲弊して、かの「海上角逐」には殆んど參加することが出來なかつ

た。そして東洋通商の利益は却つてポルトガルやスペインやオランダの如き敵國に奪はれてゐた。殊に光榮ある極東の傳道事業はローマ教皇アレキサンドル六世によつてポルトガルに託されてゐた。かくてポルトガル政府は耶蘇會派の傳道事業と提携し、極東諸國と通商を開始して、思ふまゝに巨利を獨占してゐた。宣教師はリスボンからポルトガルの船舶に搭乘して印度のゴアに到り、それから支那、日本に渡つて傳道に從事し、目醒しい布教の實績を擧げてゐた。此等の宣教師も新興科學の研究者であつたから、日蝕、月蝕を豫言して極東君主の心を眩惑したり、或は數學の知識や醫學の知識を以つて異教の民心を收攬したのであつた。殊に彼等は「教會」の長老や祖國の大官に傳道の經過や、極東の風物を報告してゐた。其故ポルトガルは極東に於ける通商、傳道、文物の研究、この三者を自己の藥籠中に收めて、他國の均霑を許さなかつた。

ルイ十四世はポルトガルの壟斷と獨占とを坐視することが出來なかつた。當時ポルトガルは國勢、漸く振はず、極東の通商にも、傳道事業にも國力を集中することが出來なかつた。故にルイ十四世は此の機會を捉へて極東に練達堪能の人物を派遣して、通商の準備を開始し、更にフランス耶蘇會派の學僧をも極東に差遣して、ポルトガルの藥籠を自國の手に奪はうと欲したのであつた。

フランスは極東との通商に於いては不幸にして成功を收めることが出來なかつたが、傳道事業は支那に於いて著しい實績を擧げたのであつた。そしてフランスの極東旅行家や宣教師はそれ〴〵極東の任地

から、極東の事情を報告したのであつた。かくて旅行記や書簡集が續々、巴里から刊行された。例へばテヴノーの「旅行記集」(Thévenot, Relations de divers voyages curieux, Paris, 1663—1672)「耶蘇會士書簡集」(Lettres édifiantes et curieuses,écrites des Missions étrangères par quelques missionnaires de la Compagnie de Jésus, Paris, 1703—1776, 34 vol) クラッセの「日本教會史」(Crasset, Histoire de L'Eglise du Japon, Paris, 1689) がその最も主要な文獻であらう。

かくの如く「旅行記」と「書簡集」の刊行によつて極東の風物や其の文化がフランスに紹介された。既に文藝復興運動によつてヨーロッパ人の知識が增加してゐたが、今や極東文明の紹介により、フランス人の知識は增加し、一方では科學の發達によつて科學的知識が創造され、フランス人の知識の總和が益〻增大したのである。かゝる新知識の增加と科學的理性の發達とによつて、思辨其物が革新され、遂に「新精神」の創生を見るに至つた。この精神は先づピエール・ベール (Pierre Bayle, 1647—1706)「批評的歷史辭典」(Dictionnaire critique et historique, 1697, Amsterdam) の中に、最初の爆音を放つたのであつた。

十七世紀は辭典の時代であつた。先づ文學アカデミーの使命は國語辭典を編纂してフランス語の統一を圖ることであつた。殊に歷史的辭典としてはモレリーの「歷史辭典」(Moréri, Dictionnaire historique, Lyon, 1673)と有名なデルブローの「東洋文庫」(D'Herbelot, Bibliothèque orientale ou dictionnaire universel, Paris, 1697) とが出版された。この「東洋文庫」の刊行と同じ年に前述の「批評的歷史辭典」の出版を

見たのである。

この辭典の著者ピエール・ベールはもとプロテスタント教徒であつたが、カトリック教に改宗し、程なくプロテスタン教に復歸したほど宗派を弄んだのであつた。事實をいふと、彼には宗派の差別は世間を欺く看板であり、假面を剝げば歴然たる無信仰者、自由思想家であつた。遂に彼はルイ十四世のプロテスタント排擊、自由思想家彈壓の鐵槌に追はれてロッテルダムに亡命しなければならなかつた。この亡命者は祖國の壓制政治とカトリック教徒の横暴とを忘れることが出來なかつた。其故、彼は遠い他國から祖國の知識階級に自由思想を宣傳して、同胞の蒙を啓くと同時に、故國の宿敵に痛烈な復讐を敢行しようと試みたのであつた。この目的の爲に彼は厖大な辭典を刊行し、世界旅行家の見聞記事や耶蘇會派の通信記事を加へ、此等の新知識を利用して、舊知識に批判を加へ、人智進歩の正路を明示したのである。其故この辭典は歴史的と稱し、しかも公然、批評的といふ形容詞を冠した。その内容は粹の歴史にとゞまらず、政治史、宗教史、文學史、哲學史の廣汎に亙り、本文を掲げると同時に、その下欄に於いて本文に對する註釋を加へ、その註釋のなかには古今の知識を引用し、新舊知識を對照せしめ、作者自身、之れに批判を加へると同時に、讀者をして新知識を承認せしめんと企てたのである。そして下註は本文よりも遙かに細字で印刷され、その内容もまた十數倍の多きに達してゐる。此の辭典の中には「印度人」、「婆羅門」、「支那人」、「孔子」、「日本」に關する記述を發見するのである。

ベールはこの辭典を編纂するに方つて三種の根本原則を遵奉した。第一、論據を示し得ざる事實を主張しないこと、第二、容易に駁論され得べき事實に非難を加へないこと、第三、飽くまで激情を隱して、憤激的な外觀を避けることであつた。(4)

この方法はデカルトの學問研究法を歷史に適用したものであつた。言ひ換へれば此の事實はベールによつて歷史が漸く科學の段階に歩を轉じた進境を示すものと言はなければならない。そしてデカルトはキリスト敎の奇蹟や神祕を學問研究法の見地から吟味することは差控へたが、ベールに至つては新知識と舊知識とを並列して傳統思想や舊制度が如何に科學的理性と相容れないかを承認せしめんとしたのである。

ルイ十五世の卽位後モンテスキュー、ヴォルテール、ジャン・ジャック・ルウソー、ヂドロ、ダランベール等の新人が「百科全書」(Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, 1951—1772. 28 vol.)を發行して啓蒙思潮を朝野に宣傳したことは周知の事實であらう。この「百科全書」こそベールの「批評的歷史辭典」の故智に倣つたものであつた。そしてヴォルテールの思想其者も亦、ベールの思想を其儘、繼承し、その思辨に於いても、またその態度に於いても、一層、科學的深刻さを增し、その表現形式が一層、强烈と明覈とを加へたに過ぎない。いま此處で啓蒙哲學やヴォルテールの思想を紹介することは予の論題を涉外するから、之れを省略して、たゞヴォルテールの史學的業績に論議を局限するのである。

(一) Michaud, Biographie universelle, ancienne et moderne. t. XXVIII. et t. XVI.

Lanson, Voltaire, p. 110.

Villemain, Cours de littérature française. t. II. p. 17e leçon.

(二) Lavisse et Rambaud, Histoire générale du IVe siècle à nos jours : Histoire des sciences en France, t. IV, pp. 310—312.

Rambaud, Histoire de la civilisation française. t. II. pp. 441—448.

Hanotaud, Histoire de la nation française t. IV (Histoire des sciences en France : La mécanique et l'astronomie.)

La science française. t. 1. p. 94.

A. Maury, L'ancienne Académie des sciences, Paris, 1864. pp. 1—34.

(三) "Cuvier dit que c'est François 1er qui, le premier fit fleurir en France l'éruditon, Richelieu la littérature, Louis XIV les sciences." (Rambaud, L'histoire de la civilisation française. t. II. p. 472.)

(四) Bayle, Dictionnaire historique et critique. Amsterdam. 1734. article, Bellarmin. t. I. p. 732.

二

ヴォルテールは「英國通信」(Lettres philosophiques ou lettres anglaises, 1734) を出版してイギリス文明を讃美した許りでなく、パスカルのキリスト教擁護論に諷罵を加へた爲に、宮廷の怒りを買ひ、この新著は押收され、作者の身邊にも危險が迫つてきた。其故ヴォルテールは忽惶、巴里を去つてシレー

（完）

(Cirey)のシャートレー侯爵夫人(La marquise du Châtelet)の居城に身を潛めたのであつた。この夫人とヴォルテールとは舊知であつたし、夫人は彼の聲名を慕つて滿幅の敬意を寄せてゐた。併し夫人は文學よりも遙かに數學と形而上學とを愛してゐた。そして幾何學には驚くほど精通して、ニュートン、ライプニッツの學說を研究し、當時の幾何學者、物理學者として有名であつたメーラン(Mairan, 1678—1771)と學術上の論議を戰はしたことすらあつた。ヴォルテールは夫人の居城に寄寓して、完全に夫人の愛人となつたと同時に、夫人の影響を被つて、科學の研究に精進した。彼は特に物理學を研究し、ノレ師(L'abbé Nollet, 1700—1770)から實驗機械を買ひ入れ、溶爐を築いて、物理的現象を觀察したり、實驗したりしてゐた。かくて彼は「ニュートン哲學原論」(Eléments de la philosophie de Newton, 1738)を刊行して、夫人に捧げた。當時、科學アカデミーは「熱の本質と傳導」といふ論題を掲げて、懸賞論文を募集してゐた。其故ヴォルテールとシャートレー夫人とは此の論題を研究し、遂に夫人の名義で應募論文を科學アカデミーに送つた。併し夫人の論文はスキスの數學者ユーレル(Euler, 1707—1783)の論文に一籌を輸するものと認められて、他國の學者に懸賞を奪はれたのであつた。ヴォルテールは科學アカデミーの態度に憤慨し、特に夫人の應募論文に對する批判(Mémoire sur un ouvrage de phisyque de Mme la marquise du Châtelet, lequel a concouru pour le prix de L'Académie des sciences en 1738)を發表して、夫人の業績を辯護すると共に科學アカデミーの情實を暴露せんとしたのであつた。(1)

かくの如き事情から見てもヴォルテールが自然科學の研究者であり、なほ專門家にも劣らぬ學殖を備へてゐたことは否定出來ない。故に彼は物理學に於けると同じく革新現象が史學上にも出現すべきことを確信して、先づ史學の科學化を提唱したのである。(2)

(一) 歷史の懷疑的研究法

(I)アリストートルは「輕々しく物を信じないことが有ゆる叡智の基礎である」と言つたが、この格言こそ歷史を讀み、殊に古代史を讀むものに取つては、極めて重大な警告である。實際、吾人の常識から見ては到底、認めることの出來ない馬鹿〳〵しい話や物語が眼前に山積してゐる。ローマ國民がカルタゴを破壞したことは事實である。ケーザルがポンペーを征服したことも亦、事實である。併しながらカストール(Castor)とポリュークス(Pollux)がローマ國民の爲に戰つたこと、笠女が現はれて船を波間に流し、キルシュース(Curtius)が深淵に身を投ずると、その深淵が口を閉ぢたといふことは狂言綺語に他ならない。

何處の社寺に往つても靈驗や、的中したといふ豫言が讀まれてゐるし、エスキュラープ(Esculape)の寺院には奇蹟によつて病氣の快癒した話が澤山傳つてゐる。そして斯かる奇蹟の實見者が靑銅製の卓子に證言を彫りつけてゐる。また何處の寺院にも病氣の治癒を證明する繪馬が隙間なく掲げられてゐる。併し斯ういふ事實を信ずることは出來ない。寧ろ自分の實見したこともない事實を平氣で證明する愚夫

愚婦があつたといふ事實こそ信ずべきであらう。またエスキュラープの僧侶に布施を捧げた信者が多かつたこと、及び信者の子供が單純な感冒から癒つたといふことをこそ信ずべきである。[3]

（II）事實の實見者の話でも、その話が常識と容れない時には之れを否定しなければならない。例へばジョワンヴィル（Joinville）寧ろ其の「ゴール史」を古代フランス語に飜譯した學者はサン・ルイすなはちルイ九世がエヂプト王を殺して、遂にエヂプト軍に捕はれたがエヂプトの酋長がルイ九世に王冠を捧げたと斷言してゐる。併し回教徒はサン・ルイを野蠻人の國主と見做してゐたのである。しかも彼等は戰場に於いてサン・ルイを捕虜にしたのである。またサン・ルイは回教徒の大敵であつたし、また回教徒の法律も言葉も知らなかつた。然るに回教徒が斯かる國家の大敵を自國の主權者として推載することは、道理上、また常識上あり得ない話である。[4]

（III）誇張的事實を否定すること。例へばペルシャの大軍が僅か三百名のスパルタ人により、テルモピイル（Thermopyles）の狹路に於いて阻止されたといふ話がある。この話は地形上から見て肯定することが出來る。またチャーレス十二世は八千の精兵を提げて、ナルヴア（Narva）で約八萬のモスコー農兵を擊破したといふ。モスコー兵は武器の精鋭を缺いてゐたし、チャーレス王の軍勢は千軍萬馬の士であつたから、吾人は此の勝利を認めて、スキーデン軍の健闘を賞讃する。併しシモン・ド・モンフォール（Simont de Montfort）が三軍に分かれた九百の寡兵を以つて十萬の大軍を擊破したといふ。これは明か

に誇張である。何等の信頼すべき理由がない。併し人は奇蹟だといふ。一體、神がシモン・ド・モンフォオールの爲に奇蹟を行つたといふことが果して事實なりや否や、先づ此の點が信頼出來ないのである。(5)

(IV)記念建築物、年中行事、メダルは必ずしも史實的論據とはならない。國民は或る事件を長く後世に傳へるため、記念建築物を立てるものである。そして識者は此の記念物を見ると、その記念する事件を信じ易いものである。その記念物は事件發生當時の人が立てたものであるかも知れない。それにしても記念物の傳へる事實が常識上、あり得べからざる內容であるならば、猥りに之れを信ずることは出來ない。此の記念物の建立者は世間一般の俗論を子々孫々に傳へて、長く此の事實を是認せしめんが爲に建設したのである。そして記念物の記述を信ずることは出來ないが、却つて此の記念物が俗論是認の目的を以つて建てられたといふ事實は信頼し得るのである。ヂュイリュース(Duillius)と同じ時代の人々がローマに船首形の柱を立てた。この柱はヂュイリュースの齎した海戰の勝利を證明することは疑ひを容れない。併しナヴィユス(Navius)は剃刀を以つて小石を切つたといふ話を記念する爲に其の立像が建てられたが、此の立像は此の不思議な事實を證明してはゐないのである。今日も殘存してゐる有名なラコーンの立像はトロイの馬の傳說が眞實であることを證明してはゐない。ローマで二月十五日に行はれるリュペルカル(Lupercales)の祭はロミュリュスとレミュスを育てた牝狼の爲に行はれるものである。この祭は此の話が史實であつたことを絕對に證明してはゐないのである。(6)

要するに古代國民の年中行事も肖像も寺院も神社も多くは傳說や物語に基いて出來上つたものである。これと同じくメダルも亦、事件の發生當時、鑄造されたものですら、必ずしも史實を證明してゐるとは言はれない。例へば一七四〇年に起つた英西戰爭の際、ヴェルノン提督（L'amiral Vernon）がカルタジェーヌ（Carthagène）を占領した祝勝記念としてイギリスではメダルを賣りだした。然るに何ぞ知らん、ヴェルノン提督は其時、敵地から敗退してゐたのである。メダルの調製者は王侯に阿附し、民心に迎合せんが爲に、まだ戰爭の結果が分らないうちから、自國の戰勝を豫想してメダルを作つたり、或は事業の完成しないうちから、その峻功を記念してメダルを賣り出すのである。從つてメダルは必ずしも史實を證明してはゐない。たゞメダルの記念する事件は、當時の識者の多數が文辭によつて之れを證明した時に初めて重大な證據となるのである。そしてメダルと識者の記述とは兩々、相俟つて事實を證明するものである。

過去の說話が史實的價値を持つためには、この說話の發生した當時の人々が之れを承認してゐなければならない。

「我々は確證された眞理のみを歷史的眞理と認めるのである。レッス樞機員（Cardinal de Retz）もラ・ロシフコー公（Le duc de la Rochefoucauld）も同じ時代に生存してゐたが、互に敵視してゐた。そして此の二人が各〻手記の中で、同じ事實を認めてゐる。かかる事實は疑ひの餘地がない。然るにこの二

人が同一事實を或は肯定し、或は否定するならば、歴史家はこの事實を疑はなければならない。なほ常識から見て疑はしい事實は、信頼し得る同代人が數名、意見の一致を示さない限り、絶對に此の事實を信頼してはならない。」(Le siècle de Louis XIV. chap. XXV)

思ふに如何なる確證も數學上の證明とは異り、極端な「蓋然性」(probabilité) に過ぎない。歴史的確證も亦、この「蓋然性」に屬してゐる。されば同じ時代の人、殊に信頼し得る同じ時代の人が多數、同じ意見を發表する場合には之れを事實と見做すことが出來るのである。例へば元朝に仕へてゐたヴェニスの商人マルコ・ポーロはその「東方見聞錄」のなかで初めて支那の强大なこと、及び人口の多いことをヨーロッパ人に傳へた。併しこの事實を紹介したものはマルコ・ポーロたゞ一人であつた。其故、彼の見聞は殆んど信ぜられなかつた。その後、二世紀ほど遲れてポルトガル人が支那に渡來し、マルコ・ポーロの見聞を確からしい(probable)ものにしたのであつた。そして今日では支那に入國するヨーロッパの諸國民が一樣にマルコ・ポーロの記事を認めてゐるから、その見聞錄の內容は史實と見做されて、その價値を疑ふものはない。(7)

チャーレス十二世は自己の恩惠者であつたトルコ皇帝の國內に己むなく滯在してゐた。この國王は家臣と共にトルコ兵とタルタール軍とを敵として交戰したと傳へられてゐる。僅か二三の歴史家が此の事實を記述してゐるならば、判斷を差控へなければならない。併し此の事實の見聞家に其の眞僞を質問し

てみると、彼等は毫も之れを否定しなかつた。其故この事實を信じなければならない。思ふにチャーレス十二世の行動其者は聰明を缺き、破格的な行爲であつたにせよ、決して自然の大法と牴觸してゐないし、また此の國王の英雄的心事とも牴觸してゐないからである。(8)

一言すれば或る事實が史實として認められるには左の如き條件を必要としてゐる。

「公共の記錄によつて承認され、なほ首府に生活して互に意志が疏通してゐて、しかも國家の主要な人物の眼前で執筆する同じ時代の著者が承認した出來事を信じよう。併し無智蒙昧な田舍で村夫子の書いた荒唐無稽的な小事件に就いては、また馬鹿らしい事情を滿載する物語や、歷史を美化するどころか、却つて其の名譽を傷ける靈妙不思議な事蹟に就いては、之れをヴォラジーヌ(Voragine)や耶蘇會士コーサン(Caussn)やマンブール(Mainbourg)に委ねよう。」(Essai sur les moeurs chap. CXCVII)

ヴォルテールは歷史家の史眼が小事の詮義に拘泥して、大局を通觀する能なきことを痛歎してゐる。

「何等の結論に導かない歷史上の小事實は恰も行軍を妨げる軍隊行季に似てゐる。人智が弱小であること、また人智が瑣事の繁に堪へないといふこと、この兩事實其者から見ても、大局を通觀しなければならない。年史作者は小事實を諸種の辭典の中に收錄しなければならない。そして學者は必要な時に此の辭典の中から小事實を見いだすのである。」(Abrégé de l'histoire universelle, 1754, préface t. III)

ヴォルテールが以上の懷疑的研究法を初めて實際に應用して、脫稿したのはスキーデン王「チャーレ

ス十二世傳」、(Histoire de Charles XII, 1731)であつた。當時、新聞雜誌は今日の如く刊行されてゐなかつたし、公文書は宮殿の祕閣に收められて、絕對に外見を許されなかつた。殊に國政上の祕密主義が政府と外部との接觸を遮斷してゐたのである。かくてヴォルテールはチャーレス十二世と同じ時代の人であり、しかも其の側近者であつたファブリス(Fabrice)フィエルヴィル(Fierville)ヴィルローグ(Villelogue)ポニヤトヴスキー(Poniatowski)の四氏から資料を仰がなければならなかつた。[9] そして根本史料の探索といふ見地から觀れば此の史書は幾多の缺陷を包藏してゐるにせよ、歷史の科學化を記標する最初のモニューメントとして、其の存在理由を確認しなければならない。

(二) 史的視野の擴張と文明史の發生

當時フランスは絕對君主政體であり、僧侶と貴族とが主權の運用に參加して、國民の最大多數たるブールジョワ階級にも、勞働階級にも參政權は與へられてゐなかつた。なぜなら此の兩階級は人間としての資格を認められてゐなかつたからである。この階級思想は史學の上にも反映して、國王と諸侯の事蹟ばかりが歷史の項目であつた。そして帝王の業績は侵略戰爭であつたから、戰史と外交とが歷史の全內容であつた。ヴォルテールは此の不合理を逸早く認めて、國民全部に歷史上の參加權を與へると共に、單に戰史、外交史の小範圍に止まらず、經濟、財政、宗教、學問、文藝の廣汎な見地に亙つて、國民全班の活動を敍述しようと考へた。其故、彼は「ルイ十四世時代」(Le siècle de Louis XIV, Berlin, 1752)

の執筆前、若くは刊行前にその腹案をフォルモンや親友のダルジャンソン侯に漏らしてゐる。

「私はルイ十四世時代に關する小論を書かうと考へてをりました。大兄のおかげで此の宿志が甦つてきました。若し一國王の傳記を書くのでしたら、筆を執るには及びません。併しルイ十四世の時代は書くだけの値打があります。」(Lettre à M de Formont, 26 janvier 1735)

「歴史家は此れまで帝王の傳記ばかりを書いてゐました。千四百年間、ゴールには國王と宰相と將軍よりほかには何にもゐなかつたやうに思はれます。併し我が國の習俗、法律、習慣、精神には何等の價値がないでせうか。」(Lettre au marquis d'Argenson, 26 janvier 1740)

ヴォルテールは事實、この腹案によつて「ルイ十四世時代」を起稿したから、この書の序說(Introduction)の劈頭に於いて、「作者の書かうとしたのはルイ十四世の傳記ばかりではない。作者は遠大な目的を懷いてゐる。唯だ一人の行動を後世に傳へようとするのではない。最も文化の進んだ時代に於ける社會人の精神を後世に對して描き出さうと試みるものである。」と述べ、更に同じ序說の中で、「この書の中ではルイ十四世の私生活及び朝廷と其の治世の特殊事情とが大い場所を占めるであらう。其他の記述は藝術、學問すなはち此の時代に於ける人智の進步を對象とするであらう。古來、「敎會」は政治に關與し、政府を脅かしたり、政府を强化したりして、もと道德を敎へるために設立されてゐながら、屢〻政治に沒頭し、人間の情欲に溺れてゐた。作者は最後に此の「敎會」に對して論議を加へよう。」と言つて

斷乎たる決意を示してゐる。事實「ルイ十四世時代」を見れば、作者は第二十九章に於いては當時の內政、司法、商業、警察、法律、軍紀、海軍、第三十章に於いては財政、規約、第三十一章に於いては科學、第三十二、三、四章に於いては美術、第三十五、六、七、八に於いては宗教宗派の軋轢、第三十九章に於いては、支那に於ける布教事情とかの有名な「儀禮問題」(Question des Rites) に論及してゐる。

ヴォルテールの歷史觀は年を經るに從つて益〻强烈に、益〻露骨に表白され、正に革命家の憤激を感ずるのである。

「歷史を讀むと、地球はただ僅少な主權者と、その意欲に奉仕してゐた側近者とに對してのみ出來上がつたものかと怪しまれる。その他の人間は悉く閑却されてゐる。この點から見ると、歷史家は自己の論ずる暴君を模倣してゐる。歷史家は唯だ一人の爲に人類を犧牲に供してゐる。然らば此の地上には君主のみが生存してゐるのであらうか。少しも善事を行はず、若くは盛んに惡事を行つた多くの人間すなはち帝王に對しては年代史が存在してゐる。然るに諸藝の發明者は殆んど全部、世間に知られてゐない。この事實は果して妥當なりや。」(Abrégé de l'histoire universelle depuis Charlemagne jusqu'à Charles Quint, La Haye, 1753)

ヴォルテールは既に「チャーレス十二世傳」を記述して、この國王の光榮欲、征服欲、好戰的精神を闡明した。その目的は國王の覇道政策が決して國王の存在理由を强化する所以にあらざること、國民を

撫育して、國内の平和を維持し、社會生活の幸福を增進せしめることが國王の第一義務たることを高唱したのであつた。[10] そして「チャーレス十二世傳」の出版後、彼の文化主義、言はゞ王道政治論は漸く成熟して、この思想が先づ「ルイ十四世時代」を執筆する動機となつたのであつた。

ルイ十四世もチャーレス十二世と同じく光榮欲と征服欲とに燃え立つてゐた。殊に此の國王は異教異學の禁を布いて、國民が國王と異つた意識を持つことを絶對に假借しなかつた。そしてルイ十四世こそ佛國史上、未曾の專制君主であり、暴君であつた。この暴君の治下に於いて覇業が成功し、國威が輝いたにしろ、社會慶福は實現しなかつた。併し此の覇王は文藝や科學を愛護し、また東洋に學僧を派して、その風物を研究せしめた。言はゞ此の國王は自己一身の好奇心を滿足させる爲に、若くは極めて利己的な愛國心に驅られて、佛國をして世界第一の先進國たらしめん爲に、自から異學異教の禁を破つて、異端文明を自國に輸入せしめたのであつた。かくの如く科學的理性の發達と東洋文明の研究とによつて、ルイ大王治下に於いては、フランスの精神文明が異例の發達を逐げたのである。其故、思想界の新人はルイ十四世時代の文明がペリクレス時代よりも遙かに進歩するに至つたことを指摘して、「人智進歩說」(Idée de progrès) を高唱したのである。然るに舊人は飽くまでキリスト教文明と古代文明とを尊重して文化の進歩を認めてゐなかつた。その結果かの有名な「古今優劣論」(Querelles des Anciens et des Modernes) の爭論が思想界に沸騰したのである。ヴォルテールはルイ十四世の侵略精神や壓制政治の罪を認

たと同時に、この帝王が學藝を愛護した功を忘れてはゐなかつた。そして彼は思想界の新人であつたから、もとより「人智進歩說」を奉じてゐた。彼はルイ十四世の治績のなかに覇業と王業との交錯を認めた。言ひ換れば鐵腕を擧げて國民を威嚇し、鐵槌を揮つて自由思想と自由主義とを彈壓してゐたルイ十四世の治下から、不思議にも學藝の花が咲き亂れて、フランス文化が進展したのである。これに反して世界の平和を保障し、社會慶福の實現を保證すべき僧侶や宗教家が盛んに政治に沒頭して、國王の壓制政治に加膽し、しかも神學の諍論に沒頭して、宗派爭ひの醜を演じ、却つて地上の鬪爭を刺戟したのである。故に宗教や信仰こそ却つて社會の平和を荼毒し、人智の進展を阻止したのである。そして人智の發展、文明の進歩、社會平和の發達を助長するものは、政治家や宗教家にあらずして、實に學者や、藝術家なのである。しかも彼等は其の價値を認められず、屢〻治者階級の迫害に苦しんだのである。

「此等の進歩はヨーロッパの或る都市に散在してゐた極めて少數な賢者や天才の恩惠によるのである。そして此等の賢者も天才も皆、長い間、人から知られず、しかも屢〻迫害を被つてゐた。彼等こそ幾多の戰爭が人類を毀害してゐた間に、人類を啓發し、慰安してゐたのである。」(Le siècle de Louis XIV, chap. XXXIV)

故に世人は宰相や將軍以上に學者や藝術家を尊敬しなければならない。ヴォルテールは斯かる文化主義の觀點からルイ十四世の治績と特に其の時代とを評價したのであつた。

然るにルイ十四世當時の名僧であり、王儲の教育係に擧げられたボッシュエ僧正（Bossuet, 1627—1704）は「神權說」（Politique tirée de L'Ecriture Sainte, 1709）を高唱した許りでなく、「世界史話」（Discours sur l'histoire universelle, 1681）を起稿して、人界の歷史すなはち世界諸民の榮枯盛衰が悉く神慮に出づること、次に世界の歷史はユダヤ國民を樞軸として發展したことを力說したのである。勿論この「世界史話」は信仰の所產であり、何等の學問的價値を持つてはゐなかつた。其故キリスト教を憎惡してゐたヴォルテールはボッシュエ僧正の宗教的歷史觀に痛烈な諷罵を加へたのであつた。

「神慮を透察しようとすることは常に大膽不敵なことである。この世界の全國民と他の世界の有ゆる創造物とを司る神がアジア大陸の變遷のみを考へられてゐたこと、また此の神がユダヤ小國民の盛衰や教化のみに軫念されて、多數の征服者を順々に送つたといふこと、そして頑迷な叛逆的なユダヤ小民族が我が世界革新の中心であり、對象であつたといふこと——以上の事實を學者が證明しようとするときには、かの神慮を窺はんとする大膽さに大なる滑稽が伴ふのである。」（Le Pyrronisme de l'histoire）

ヴォルテールの說によれば世界の歷史、謂ゆる諸國の榮枯盛衰は絕對に神の意志から發するものではない。全く人間の意欲、殊に不當な意欲から發生したものであり、また一面から言へば偉大な人物の出現によつて世界の變遷や革新が實現したのである。故に人間の歷史を作つたものは人間自身に他ならな

い。ヴォルテールは此の信念に立ち、かの有名な「國情民俗論」(Essai sur les moeurs et l'esprit des nations et sur les principaux faits de l'histoire depuis Charlemagne jusqu'à Louis XIII, 1756) を脱稿した。彼はボッシュエ僧正の「世界史話」に對抗して、歴史上から神若くは信仰を驅逐し、そのあとに人間を置換へようとしたのである。人間の歴史が人間の罪過を滿載してゐることは明かであらう。そしてボッシュエ僧正の言ふやうに、人間の歴史が全然、神の攝理によつて支配されるものとするならば、人間其者の惡性を認めることが出來ると同時に、神の感化力にも疑ひを挾むことが出來るのである。

「一般に人間の歴史は罪惡と狂痴と不幸の推積である。其故この三者の間から僅かな德性と二三回の幸福な時代とを、恰も荒凉たる沙漠の中に點在する住家のやうに散見するのである。もう一度、此の事實を認めなければならない。」(Essai sur les moeurs, chap. CX C VII)

ヴォルテールは「國情民俗論」の中でも、「ルイ十四世時代」に於けると同じ見地に立つて、帝王の戰史、侵略外交史のほかに、歴代の人智發達史、すなはち文化史を起稿しようとしたのである。

「人類の不幸と爭鬪といふことは人間惡に關する通說であり、歴史の悲しい對象である。併し歴史は斯かる通說や、幾多の災禍や戰史を繰り返すよりも、寧ろ當時、人間の社會狀況が何うであつたか、家庭の内部生活が如何であつたか、また如何なる技術が開發されてゐたかを予は發見しようと欲するのである。」(Essai sur les moeurs, avant-propos.)

かくの如くヴォルテールは前人未踏の觀點を發見し、この新角度から世界の文化進展を觀察せんとしたのであつた。既に「ルイ十四世時代」はフランスの文明史であつたが、この「國情民俗論」こそ堂々たる世界文明史だつたのである。

當時の新進學者は皆、自然科學を研究して、宇宙の物質現象は勿論、精神現象も亦、自然の大法によつて支配されてゐることを發見したのである。そして人間自體が自然の一部を構成してゐるから、自然法の支配を受けることは言ふまでもない。かくて新進學者は自然法の權威を認めて、神の全智全能說を打破せんとしたのであつた。超自然と自然との對立、自然法と敎會法との鬪爭が開始されて、遂に自然法は敎會法を王座から驅逐して、將に其の地位を奪はんとしてゐたのである。ヴォルテールも亦、歷史的現象を自然法の支配に歸して、この大法の偉力を讚美してゐる。

「九世紀の間を通じて、吾人の觀察してきた顚覆や破壞の中に、人類を祕かに鼓舞する秩序愛の精神が認められる。この精神が人類の殲滅を豫防したのである。この現象こそ常に自力を回復する自然機構の一つに他ならない。」(Essai sur les moeurs chap. CLCVII)

(1) Michaud, Biographie universelle, t. XXXXIX. Voltaire.
Lanson, Voitaire., p 57.
Nourisson, Voltaire et le voltairianisme. Paris. pp. 88—89.

(2) Voltaire, Nouvelles considérations sur l'histoire, 1744. "Peut-être arrivera-t-il bientôt dans la manière d'écrire l'histoire ce qui est arrivé dans la physique."

(3) Voltaire, Pyrrhonisme de l'histoire, préface de Charles XII, édition de 1748.

(4) Ibid.

(5) Ibid.

(6) Encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers. Nouvelle édition, Genève. 1778. t. XVII. L'article, "Histoire." écrit par Voltaire.

Voltaire, Essai sur les moeurs, chap. CXCVII.

(7) Encyclopédie. t. XVII. "Histoire."

(8) Ibid.

(9) Ibid.

(10) Voltaire, Discours sur L'Histoire de Charles. XII.

三

前述の通り世界旅行家の探檢記や宣教師の報告によつて東洋やアメリカの國情がフランスに傳つてゐたのみならず、既に東洋研究熱が學界、思想界に勃興してゐたのであつた。それにも拘らず、ボッシュエ僧正はたゞキリスト教に光被された國家の歷史のみを論ずる一書を起稿して、之れに「世界史話」と

いふ標題を冠した。著者の考によればキリスト教の啓沃に接した國家のみが世界を構成してゐたのである。併し新人から見れば世界は東西半球に存在する國家から成立してゐた。其故、新進學者はボッシュエ僧正の「世界史話」は不幸にして世界を見落してゐると嘲笑したのである。ヴォルテールも勿論、新進學者の代表であつたから、ボッシュエ僧正の宗教的な、すなはち非科學的態度を非難して、「國情民俗論」の中には、キリスト教以外の諸國、たとへば印度、支那、日本の國情を加へたのであつた。

ヴォルテールは支那正史の記事に滿幅の信頼を置いてゐる。なぜなら支那の正史は奇蹟、靈事、靈驗を記載せず、純然たる人間の歴史を集錄してゐるからである。殊に此の國の正史や「春秋」は太古から日蝕の如き天文現象を記載してゐるから、此等の歴史書は單に人間界の歴史を記載してゐるばかりでなく、天界の歴史を收載してゐるのである。そして佛國耶蘇會士ゴビール師[1]は孔子の「春秋」に記載された三十六回の日蝕を調査して、僅かに二回の誤りと二回の疑はしい記事とを發見したのに過ぎなかつた。抑〻支那の天文學者が斯の如き誤りを犯したとするならば、彼等が實際、日蝕を觀測してゐたことは疑ひを容れない。支那史に散見する日蝕記事は西暦紀元前二千五十五年前から觀測されたものであり、バビロンに於ける天文觀測記に次ぐ世界最古の記錄である。[2] 支那正史の編纂は皇帝の專制政治を豫防する一方法である。換言すれば支那の歴史は道德に代つて、綱紀肅正の重責を行ふものである。歴史は先づ皇帝を國民とを教戒するのである。故に支那史の記事は此の點から見ても、十分、信頼を置くことが出來

るのである。そして前述の如く支那の正史には架空的事實や事蹟が全然、記載されてゐないし、神と稱する人間の事蹟を記載してゐない。其故、支那史の記述は常に眞實と自然の觀を與へるのである。この特徴こそ實に支那史が他國の歴史を凌駕する所以でなければならない。一言すれば支那人は初めて歴史を書き出して以來、常に理性に從ひ、道理を尊重して事實を執筆してきたのである。(3)

ヴォルテールが支那史を始めとして、其他、支那の道德、政治、文物制度の全部に亙つて此の異端文化を讃美する理由は、支那の文物制度が孔子教すなはち德教に基いてゐるからである。支那の德治主義、民本主義の思想が彼の政治思想と合致してゐたことは言ふまでもない。殊に支那は昔から信仰の自由を認めてゐたし、就中、康熙帝はヨーロッパの傳道僧を寵遇され、キリスト教の信奉を公許されたのであつた。從つて「信仰の自由の使徒」と呼ばれるヴォルテールは支那の政治思想に自己の理想を發見したのである。そして支那文明はキリスト教以前の文明であり、また此の宗教以外の文明であつた。其故ヴォルテールは支那文明に共鳴すると同時に、此の異教文明を讃美することによつてキリスト教思想やその文明の權威を失墜せしめんと圖つたのである。

ヴォルテールは「國情民俗論」の中で、日本の國情と禁教事情とを敍し、宣教師がヨーロッパの商人と結託して自國の侵略政策を支持して其の手先を務める不正不義を難詰してゐる。宣教師に國家覬覦の野心ありといふ風評は豊臣時代からの嫌疑であつた。この嫌疑は獨り我が國の官邊を脅かしたばかりで

なく、フランスに於いても新進思想家の間に公然と認められてゐた。ヴォルテールは「宣教師はローマ教皇の支那に送つた軍事探偵なり」と絶叫して、極東諸國の君主に警告を發してゐる。[4] そして日本政府が逸早く西歐傳道僧の野心を看破して、嚴重な禁教令を發布したことは日本人の聰明を立證するものと言はなければならない。

「宣教師は日本で多數の敵を持つてゐたが非常に强大な黨派を作つた。佛僧は宣教師から所領を奪はれまいかと懸念してゐた。そして遂に主權者は國家の爲に懸念するに至つた。既にスペイン人は日本に近いフィリッピン群島を占領してゐた。また彼等がアメリカで何にを行つたかも知れてゐた。日本人が恐れをなしたのは理の當然である。」(Essai sur les moeurs, chap. CXCVI)

ヴォルテールは家光の禁教令と外人驅逐策には滿腔の贊意を表してゐるが、鎖國政策が勇敢な我が國民性と相容れないことを指摘してゐる。

「日本では異國人と交際することが最も重い罪科の一つとなつた。日本人は危機を脱した後でも、異國人を恐れてゐたらしい。この杞憂は日本國民の勇氣と相容れないし、また國家の堂々たる氣魄とも合致しない。併し將來に對する恐怖よりも寧ろ過去の怖しさが日本人の心中に働いてゐたのである。日本人の行動は寛容な高潔な國民、しかも斷乎として決意に固執する國民の行動であつた。彼等は初め異國人を歡迎した。そして異國人から侮辱され、叛かれたと信ずるや否や、永久に彼等と斷交

したのである。」((Essai sur les moeurs, chap. CXCVII)

なほヴォルテールの説によればコルベールが初めて巴里に「支那會社」を設立した時、プロテスタント派の宣教師を手先として、日本と通商を開始しようと努めた。併しオランダ人がこの計畫に反對したし、日本人も亦、オランダ人との通商に滿足してゐたから、フランスとの通商を好まなかつたといふ。

ヴォルテールは支那に關する資料を主として「耶蘇會士書簡集」、ヂュ・アルドの「支那帝國全誌」(Le P. du Halde, Description géographique, historique, chronologique, politique et physique de L'Empire de la Chine et de la Tartarie chinoise, Paris, 1735)に仰ぎ、日本に關する資料をケンペル「日本史」に仰いだ。

前述の通りヴォルテールこそ根本資料の蒐集、史料批判の必要を力説して、史學を科學化した先覺であつた。そして此の開拓者は自家の主張を宇義通り實際に摘用して、キリスト教の教理や其の傳說や古代神話の祕扉を開いて懷疑のメスを縱横に入れ、その不條理と嘘僞と誇張を暴露して、完膚なく迷信と錯覺とを嘲笑したのであつた。然るに極東の史料に關しては、フランス耶蘇會士、殊に侵略政策の手先として、また軍事探偵として大いに嘲罵した傳道僧の支那紀聞を殆んど其儘、援用して、キリスト教と此の教理に基く文物制度論擊の具に利用したのである。彼と同じく啓蒙哲學者であつたヂドロ(Diderot, 1713—1784)、レーナル(Raynal, 1713—1796)、マブリー(Mably, 1709—1785)は、それぞれ自著に於い

て (Diderot, La Chine, L'Encyclopédie : Raynal. Histoire philosophique politique des établisments et du commerce des Européens dans les deux mondes, Paris, 1770 : Mably, Doutes proposées des philosophes économiques sur l'ordre naturel des sociétés politiques.)、フランス耶蘇會士の支那紀聞を科學的理性上から分析して、その信憑すべきものと然らざるものとを識別したのである。然るにヴォルテールのみが支那史料に批判を加へなかつた點から見て、彼こそ自己の宣布した制約を自から蹂躙したものであり、この自由主義者は言はゞ自身の最も唾棄した暴君に、學問上の暴君に墮落したのである。彼が歴史こそ哲學者の仕事であると主張して[5]、僧侶の手から歴史を奪つて之れを哲學者の手に收めた。併し當時の哲學は啓蒙哲學であり、キリスト教の倒壞、自由主義、民政主義の確立を理想としてゐた。そしてヴォルテールが此の哲學運動若くは政治的、社會的、思想運動の先驅であり、その旗手であつたことは言ふまでもない。其故、彼は祭壇と王座との倒壞の爲に歴史を利用したのである。換言すればヴォルテールは此の目的に適合する事實を多く東西の歴史中から搔き集めて、巧に自己の主張を證明したのである。故に彼は廣く史料を蒐集し、之れを純粹な科學的見地から、批判して分類し、その因果關係を求めて、或る論斷や結論に到達したのではない。殊に彼は自己の論議を支持し、これに精彩を加へる爲には、根本史料の内容を猥りに改竄し、或は之れを歪曲することすら憚らなかつたのである[6]。

彼の先驅者であつたピエール・ベールは「批評的歴史辭典」の中でデカルトの研究法を歴史に適用し

て、飽くまで憤激を抑制して客觀的態度を取れと警告したにも拘らず、ヴォルテールは此の警告を斥け、憤然、舊思想と舊文明とを露骨に痛罵したのである。要するに彼は歴史の科學化を高唱しながら、實は歴史を既成制度倒壞の具に供して社會革命を成就せんと欲したのであつた。彼の提唱した歴史の科學的研究法は今日から見れば學者の一般常識であり、何等、奇とするに足りない。併しながら十數世紀の長きに亙つて、信仰と阿諛の埃に埋れてゐた歴史を、今から二百年前、初めて祭壇と王座の上から引摺り下ろして民衆の階級と科學の段階とに近づけた功勞に至つてはこれを多とすべきであらう。實際、當時に於いては科學の假面を被つて非科學的の行動を取らなければ歴史上の革命すらも成し遂げることが出來なかつたのである。

前述の通りヴォルテールは科學者であり、自由主義者であつたから、人智の進歩すなはち技術、文藝、學問の發達を尊重してゐた。この思想は歴史の分野を擴張して、文化史の發達を促したのである。實際、彼は人類社會の幸福を增進すべきものは學藝であり、宗教や信仰は、却つて人類の慘禍を增進すると信じてゐたのである。この思想はキリスト教が舊社會を統一してゐた功績を認め、また宗教的情操の價値を信じて「人類教」を創立したオーギュスト・コントによつて是正されることは周知の事實である。とにかくヴォルテールが人智進歩の意義を理解して、遂に文明史を創肇した勳績は單に史學の進歩たるに止まらず、學藝全體に對して公正な價値判斷を加へ、延いて學藝の進歩を促し、學藝家の社會的地位を

も向上せしめるに至つたのである。

ヴォルテールの「國情民俗論」は單に文明史の權輿であつたばかりではない。この文明史は東西の文明を比較論評したのであつた。今日、最新の學問として、フランスに誕生し、次いで諸國に發生を見るに至つた比較法學、比較政治學、比較文學の如き比較科學は皆、この比較文明史に其の起源を發するのである。實際、「國情民俗論」は東洋文明を評價して、聖書以外にまた聖書以前に優秀な文明が世界に存在してゐた事實をキリスト教國に紹介したのであつた。そして正統キリスト教國たるフランスの學界から發した東洋文明の承認は、キリスト教徒の高慢な鼻先を太かに打挫いたのである。詳言すればキリスト教徒は「文藝復興」運動以後、再び「光は東方より」の主張を是認するの己むなきに至つた。其故、既に勃興してゐたフランスの東洋研究は益〻興隆し、最高學府には東洋語、東洋學の講座が設けられ、東洋研究書が續〻巴里から出版されて、恰も明治時代に於ける西洋研究の如き盛觀を呈したのである。

要するにヴォルテールは社會哲學者としてはブールジョワ階級に參政權を與へ、また歴史上にも此の階級の參加權を與へたと同じく、東洋史や其の文明にも西洋史上に登場權を賦與して、東西兩半球の歴史を初めて結合し、人類全部に人類の全史を綜觀せしめたのである。故に東西通航開始の勳績が東印度航路發見者の頭上に輝くならば、東西思想流通の榮冠は東西文明比較史の創肇者であつたヴォルテールの頭上にも、同じ光彩を發揮しなければならない。（完）

(1) Le P. Gaubil, Histoire de l'astronomie chinoise depuis la fondation de L'Empire chinois jusqu'à l'an 206 avant Jésus-Christ. (Observations mathématiques, astronomiques.....publiées par le P. Souciet, t, II. Paris, 1729)

Voltaire, De la Chine (Essai sur les moeurs, chap. 1)

(2) L'Encyclopédie; article "Histoire."

Voltaire, De la Chine, Essai sur les moeurs, chap, 1.

(3) Ibid.

(4) Voltaire., Avis à tous les Orientaux.

(5) Lettre à Duclos, 1745. "Il n'appartient qu'aux philosophes d'écrire l'histoire."

(6) 例へば雍正帝の禁教令發布の原因に就いてヴォルテールは「三名の皇族が兵役を忌避した」と言つてゐる。事實は然らず拙著「支那思想のフランス西漸」の中、「雍正帝の禁教事情」と「ヴォルテールの支那觀」とを參照。